

[博士論文審査要旨]

申請者：福山倫基

論文題目 構造マトリクスを中心とした情報技術と原価計算ロジックの計算法に関する考察

審査員 尾畑 裕

中馬宏之

荒井 耕

従来、原価計算は、原価計算の計算構造の部分のみが強調される傾向があった。しかし、実際に企業に原価計算システムを導入するさいには、計算構造の理論的側面のみならず、計算構造とその意味について原価計算システム設計者と原価計算の専門家以外のひとの間で共通の認識をもつこと、既存の業務システムのデータベースとの連携、ユーザインタフェイスの問題などをあわせて考慮する必要がある。この論文は、このような視点から、原価計算システムを実際に設計し、導入するプロセスの全体を一貫したプロセスとしてとらえ、その全体を考察の対象としている。データベースに関しては、さまざまな業務で利用されるローカルなデータベースから原価計算に必要なデータを抽出するための標準データベースという仮想的なデータベースを構築するさいの技術的な問題を取り上げている。情報技術基盤を原価計算の視点からアプローチした研究を詳細に検討しているが、とりわけ構造マトリクスという技法について、従来どのような評価がなされてきたかという点を中心に詳細に検討している。そのような従来の研究をふまえつつ、さまざまな専門家の間で原価計算のロジックの理解を共有するための共通言語を構築しようとする試みを行っている。そのような共通言語を独自に開発しようとするが、そのような観点から構造マトリクスを再検討することにより、構造マトリクスについて従来と異なる新しい評価を行っている。

本論文の貢献は以下の2点であると思われる。

第1に、原価計算システムを実際に設計し、導入するプロセスの全体を一貫したプロセスとして、総合的に取り上げている点である。とりわけ、データベース、計算構造、ユーザインタフェイスが相互に関連しあっていると主張はきわめて重要である。そのような視点から実務的に重要な問題を、理論的に整理することが可能になっており、高く評価できる。

第2に、原価計算の専門家とさまざまな専門家の間で原価計算のロジックの理解を共有するための共通言語を構築しようとする点は、きわめてユニークな取り組みとして高く評価することができる。原価計算は非専門家には理解がむずかしく、ブラックボックス化する傾向があるので、このような共通言語は、さまざまな専門家の間で相互理解を促進するためのしくみとして高く評価できよう。しかも、そのような共通言語を実際に実装するさいのことを考慮した検討がなされており高く評価することができる。

本論文にも問題点がないわけではない。ひとつには、申請者が提案する原価計算の共通言語は、実装面からはよく考えられているものの、可読性という観点から見るとまだまだ改善の余地がある点である。原価計算設計者が他の専門家と意思疎通をするという観点からみると記法のわかりやすさはきわめて重要な要素となる。ただし、この問題点は、申請者の今後の研究にて克服可能なものであり、本研究の価値を損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。